

沖縄協会だより



平和の絵—「戦争と平和」

20点連作—第13作

西村計雄 作

今帰仁のあかき桜

300号

〈制作意図〉夕映えに染まる伊江島の海。全山をあかく埋めつくす今帰仁の桜。しかし、そのひとひらひとひらは、桃の花に似た花片を下向きに咲かせつつまじやかである。この清澄な自然に象徴される明るく穏やかな“沖縄の心”を安土桃山時代の日本画の手法を意欲的に取り入れた画面に鮮やかに表現したものである。
(昭和58年1月14日寄贈)

「四年にもはや近づきぬ今帰仁のあかき桜の花を見しより」

これは天皇陛下が皇太子時代の昭和51年1月、沖縄国際海洋博覧会閉会式ご臨席の折今帰仁城跡でご覧になった桜の思い出を、昭和55年「歌会始の儀」のお題「桜」でお詠みになったお歌で、このお歌より作品名を付けさせていただいた。

平和の絵—「戦争と平和」

沖縄平和祈念堂の堂内壁面を飾る20点連作絵画「戦争と平和」(各300号)は、フランス芸術文化勲章を受章した北海道出身の西村計雄画伯(1909~2000)が制作した。平和を願う西村画伯のライフワークとも呼べる作品で、すべて沖縄を題材に描かれ、沖縄平和祈念堂と一体となって沖縄県民の“心”が表現されている。
(沖縄平和祈念堂所蔵)

沖縄協会は、沖縄が本土に復帰するまでの間、各種の援護活動を行った特殊法人南方同胞援護会(昭和31年~47年5月)の後を受けて、昭和47年9月20日に設立された内閣府所管の公益法人です。新たに設立した財団法人沖縄協会は、南方同胞援護会の実績と経験を活用して、沖縄の振興施策に積極的に協力し、平和で豊かな沖縄県の建設に寄与してまいりました。平成23年(2011)4月1日、沖縄協会は内閣総理大臣より公益財団法人として認定を受けて「公益財団法人沖縄協会」として新たな一歩を踏み出しました。これからも、沖縄県の健全な発展と幸福な社会形成に役立つ事業を行いながら、沖縄平和祈念堂の管理運営をすることで、平和で豊かな沖縄県の建設に貢献していきます。

第38回
(平成28年度)

沖縄研究奨励賞 受賞者紹介と受賞理由



【自然科学部門】

照屋 俊明(てるや・としあき)

- 所属：琉球大学教育学部・准教授
- 年齢：42歳
- 研究題目：シークワサー果皮とギンギシを用いた機能性素材の研究開発



【人文科学部門】

西岡 敏(にしおか・さとし)

- 所属：沖縄国際大学総合文化学部 日本文化学科・教授
- 年齢：48歳
- 研究題目：琉球列島の歌謡・詞章における言語文化学的研究



【社会科学部門】

野添 文彬(のぞえ・ふみあき)

- 所属：沖縄国際大学法学部 地域行政学科・准教授
- 年齢：32歳
- 研究題目：施政権返還後の沖縄米軍基地と日米安保体制についての研究



考を重ねた結果、次の受賞者・3件に決定した。

シークワサー果皮とギンギシを用いた機能性素材の研究開発

照屋 俊明

受賞理由 シークワサーは、沖縄を原産地とする小果の種の多い寛皮(むきやすい)柑橘である。柑橘類の分類

や生態の研究で世界に知られた田中長三郎博士は、「大宜味村や本部半島の石

灰岩地帯に群落する野生のシークワサーは、その規模や保安全性は突出しており、他国では例を見ない広大なものである。」と述べている。

沖縄の方言で、シーといえば酸のことである。クワは食べさせる、与える、加えるの意で、サーは者、物である。すなわち、酸橘として芭蕉布等のサラシの材料や洗髪材として、また食材の酢や生果として古くから活用されており、完全なる沖縄オリジナルである。

1960年代の初頭から、台湾から入ったミカンコミバエのため、沖縄の果物は、「ことごとくウジが湧き、大宜味村や本部町では、秋になるとシークワサーの木の下のウジの入った果実の穢穢となり、極めて厄介な存在であった。

ミカンコミバエの根絶事業が成功するとともに、沖縄の果実は復活し、今やシークワサーは無農薬の機能性の高いジュースとして世界に通用する突出した存在になりつつある。

その際に発生する廃棄物は膨大であり、飼料等への活用や、医療、健康面で注目されている果皮のノビレチンやタンゲレチンを含むポリメトキシフラボノイドの含量も極めて高く、果肉残渣の機能性植物繊維化としての可能性も期

待されている。

このような可能性について、これまで多方面から検討が加えられているが、産業化という観点から考えると様々なハードルがあり、安全性や経済性、機能性の拡大に課題が残されている。

本研究は、有害とされるシネフリン(アルカロイド)を含まないポリメトキシフラボノイドを低コストで高純度に抽出する方法を確立し、広汎な医学や健康の分野に応用できるように完成度を高めている。また同様な手法をベースに、ギンギシに含まれる機能性成分(ネポジン)の抽出にも成果を上げており、極めて優れた研究である。

(比嘉 照夫 選考委員)

琉球列島の歌謡・詞章における言語文化学的研究

西岡 敏

受賞理由 西岡敏氏の研究は、琉球文学の言語学的な研究と琉球方言の敬語研究の二つからなる。叙事的歌謡文学の「おもろさうし」の研究は、仲宗根

政善、高橋俊三の言語学的な研究によつて大きく前進した。しかし、琉歌を代表とする短詩形抒情文学の言語学的研究は大きく遅れていた。西岡氏は、歴史音韻論の成果を土台に定形短詩文学の詞章に韻律が与える影響を研究し、琉歌や喜界島八月踊り歌を分析して、八八八六の音数律が詞章に制約を与

え、単語の語頭音脱落が起きていること等を明らかにした。八重山歌謡に出てくる詞章の語形を音数律の観点から分析し、日常語では語頭音脱落した語形でも歌謡の中で元の語形が保存されている、日常語とは異なる文語的な性格を持つ語形が存在を明らかにした。西岡氏は短詩形歌謡の研究の基礎を作ったといつてよいだろう。

西岡氏は、複雑に絡み合った人間関係と社会構造を反映して様々に発達した琉球各地方言の敬語を、話者と聞き手の具体的な場面の中で分析し、その用法と使用条件を解明している。特に研究の遅れていた八重山方言の敬語の研究は大きな成果といつてよい。竹富島方言の尊敬補助動詞トールン、謙讓補助動詞ツシャリルンを文脈、場面の中で分析したうえで、トールンを重ねた二重敬語が発生したこと、それに伴ってトールンの恩恵の意味が遁滅したこと等を明らかにした。また、終助詞ユーが叙述文と命令文で、ネーラが依頼文で、ナーラが疑問文で使われ、対者敬語の機能を担うことを明らかにしている。終助詞の対者敬語性を明らかにしたことは大きな成果である。消滅の危機に瀕した琉球方言の普及・継承活動にも取り組んでいるが、敬語研究が一冊に集大成されれば、若い世代の方言継承の大きな壁を取り除く一助となる。受賞を機になお一層精進され、若い研究者

集団の先頭に立つて琉球方言研究の進展に大きく貢献することを期待したい。

(狩俣 繁久 選考委員)

施政権返還後の 沖縄米軍基地と日米安保体制 についての研究

野添 文彬

受賞理由 沖縄の施政権返還は戦後沖縄にとって、極めて重要な歴史の転換点であり、沖縄県民は本土復帰に際し、二つの重要な課題の解決を期待した。一

つは沖縄の振興開発であり、二つ目は米軍基地の過重負担の軽減である。このうち沖縄振興開発については、四次にわたる振興計画の実施により所定の成果をあげてきたが、基地の過重負担問題については進展が見られていない。

復帰前の沖縄の米軍基地問題についての研究成果は多大であるが、復帰後については未解明な部分が多い。このため、施政権返還後も米軍基地の過重負担が続いた背景や、普天間基地返還合意後の日米沖間交渉の停滞、現状打開策について明確な回答が得られないという問題がある。

野添氏の研究業績の特色は、研究史の上では空白だった返還後に力点を置き、日米間の交渉過程について外交資料を駆使して実証的に分析し、米軍基地問題の構図を解明していることにある。また、この問題を考える上で、米・日・沖

三者間の相互作用という観点から統合的に分析し、米国の世界戦略、日本の安全保障政策、沖縄の政治経済状況がもたらす、基地問題を巡るダイナミズムの描写は優れている。

野添氏の研究成果によれば、米国政府がベトナム戦争後の米軍再編を進めるなかで、沖縄米軍基地の大幅縮小も検討していたが、日本政府が米国のアジア関与縮小への不安から海兵隊の維持を要請し、対米協力を進めてきたと

する。

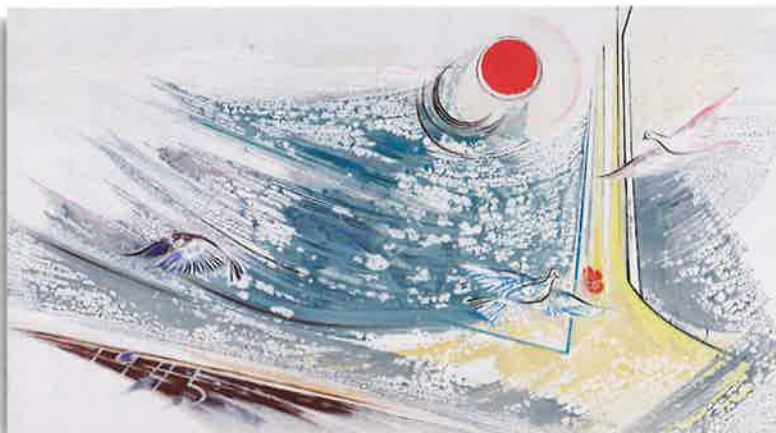
直近で生じている東アジア国際関係の変動が、沖縄の米軍基地問題にどのように影響するかを見極めるうえでも、今日の沖縄の現状を招来した近い過去の歴史の冷徹な分析が必要であり、野添氏の研究業績はそのような重要な研究の一つであるとして評価される。今後一層の研究の進化と展開が期待される。

(譜久山 當則 選考委員)

平和の絵「戦争と平和」 沖縄に熱き想いを

西村計雄 作 300号

20点連作一第1作



〈制作意図〉青い海と左上の白い島かげは、単に沖縄ではなく世界をさし、右の真っ赤なハイビスカスと平和祈念堂の尖塔部分を一部省略したのも全世界の平和を意図したからである。平和をより強調するため、沖縄戦(戦争を指す)を数字と傷つき沈むハトにとどめた。わたしは昨年、沖縄の伝統的漆器や織物、陶器にふれることができたが、その美しさにうたれた。真っ赤な太陽は漆工芸の堆錦の色をあらわし、縦横に流れる線のイメージは竹富のミンサー織りの感じとそのすき透る海面の複雑な動きを採り入れた。また、特殊なキャンバスを考案し画面全体が浮き立つような感じを持たせ、紅型の美しさも表現してみた。上空のピンク色は、温かい沖縄の人びとの心、こころのこもった琉球料理の味が、なつかしい母の愛を感じ、自然とこの色が出てきた。(昭和54年2月9日寄贈)

西村計雄[明治42年生 北海道] 東京美術学校卒、藤島武二に師事。1943年文展(現・日展)特選。戦後早稲田中学校と高等学校の教師を勤め、51年に42歳で単身渡仏する。ピカソの画商カーンワイラー氏との出会いを契機に、53年よりパリを中心にヨーロッパ各地で個展を開催。その作品は、フランス国立近代美術館やパリ市美術館に買い上げとなった。フランス芸術文化勲章、パリ・クリティック賞、勲三等瑞宝章、他受賞多数。北海道岩内郡共和町名誉町民、共和町立西村計雄記念美術館開館。2000年12月4日没。

沖繩平和祈念堂開催諸行事「慰霊・平和祈念行事他」

ライオンズクラブ国際協会
3371D地区ガバナーによる記念植樹

平成28年9月16日、ライオンズクラブ国際協会3371D地区(鹿児島・沖縄)の喜望光弘地区ガバナー沖繩公式訪問を記念して沖繩平和祈念堂前庭で記念植樹が行われた。植樹に先立ち、去る大戦における全戦没者の御霊への鎮魂と世界の恒久平和を祈念して参加者全員で黙祷を捧げた。

続いて、喜望ガバナーが平和の使者として飛び交うオオゴマダラ(蝶)の食草「ホウライカガミ」を植樹し、鋳入れを行った。

沖繩・奄美大島・鹿児島 「第18回和合の茶会」

平成28年10月21日・22日、一般社団法人茶道裏千家淡交会による沖繩・奄美大島・鹿児島「第18回和合の茶会」が那覇市と糸満市で開催された。22日に沖繩平和祈念堂で平和祈念献茶式が挙行され、県内外からの会員・来賓の方



が約400人が参列した。

そのなかで行われた茶道裏千家前家元鵬雲斎千玄室大宗匠による献茶の儀は、戦没者慰霊と恒久平和を祈念し、沖繩平和祈念像に濃茶・薄茶を恭しく献じた。平和祈念堂における千玄室大宗匠ご自身の献茶は今回で7回目。千玄室大宗匠から茶道を通して世界平和実現を訴えるメッセージが述べられた。

沖繩ライオンズクラブの 清掃活動

平成28年11月26日、沖繩ライオンズクラブ(又吉康夫会長)の約40人の皆さんによる清掃活動が行われ、沖繩平和祈念堂管理事務所の前にある遊歩道周辺と花畑を清掃した。同クラブの皆さんは毎年2回、霊域を浄めるために清掃を実施している。ご協力により清浄で緑鮮やかな空間が広がった。

糸満平和祈念コンサート Vol.2

平成28年11月27日、糸満平和祈念コンサートVol.2(主催・同コンサート実行委員会)が開催された。昨年の戦後70年の節目にこのコンサートは始められ、沖繩戦で亡くなられた方々への鎮魂と平和を祈る深い思いが込められた企画。出演は国内外で活躍する若手

音楽家で、歌手の宮平真希子さん(ソプラノ)・仲本博貴さん(バリトン)・益井理紗さん(エレクトーン)によって演奏された。134人の来場があり、観衆を魅了した。

沖繩平和祈念像浄め

平成28年12月26日、沖繩平和祈念堂恒例の沖繩平和祈念像「浄め」が行われた。この浄めは、毎年大晦日の夜から元旦にかけて開催する「摩文仁・火と鐘のまつり」と新年を迎えるに当たって行われるもの。平和への思いを新たにし、平和祈念像のほころいを払い浄めた。

今回も沖繩バス(株)のバスガイドの皆さん、沖繩県工芸振興センターの職員、研修修了生の皆さん他26人の方々が参加して行われた。

参加者は、沖繩平和祈念像の上部から台座の龍の彫刻まで白い布で丁寧にふき払い、修学旅行団や各種団体から奉納された折り鶴・平和宣言などを整理した。

その際に、沖繩平和祈念像の制作に従事した糸数政次さん(沖繩県立芸術大学美術工芸学部工芸専攻漆芸分野教授)に祈念像の上部を中心に表面の状態も確認してもらった。

函館豆記者の取材

平成28年12月26日、第40

回平成28年度函館豆記者交歓会の豆記者15人と事務局引率者2人が沖繩平和祈念堂を訪れた。

函館豆記者の一行は、毎年異なる地域の自然や文化、人びとの暮らしを学ぼうと沖繩取材に訪れており、当日は平和学習とあわせて県南部の沖繩戦関連施設を中心に見学・取材を行った。

豆記者一行を出迎えた比嘉正昭専務理事は、沖繩平和祈念像の原型を制作した山田真山画伯などについて説明を行い、豆記者達も間近で見ると平和祈念像の大きさに圧倒されながら詳しい説明を聞き、質問を交えて熱心にメモを取り取材活動を終えた。



第39回摩文仁・火と鐘のまつり

平成28年12月31日から29年1月1日にかけて第39回「摩文仁・火と鐘のまつり」を開催した。当日は約800人が参加し、去りゆく年をふりかえり、新しい年の世界平和を誓った。まつりのクライ

マックスでは、参加者が持つたいまつで幾つもの円陣を描き、清らかな祈りの歌・沖繩平和祈念像讃歌が献唱された。そして、新年の訪れとともに平和の鐘が鳴り響き、同時に代表7人が円陣中央の聖火台に平和の火を灯し、勢いよく祈りの炎が燃え上がった。続けて、参加者全員で新年を祝う歌曲を合唱し、すがすがしい空間を



共有した聖なる炎と鐘の音が織り成す祭典を終えた。

トピックス

沖繩文化協会賞決まる

平成28年10月20日、沖繩学の若手研究者を対象にした第38回沖繩文化協会賞の発表が行われた。受賞者は次の3氏。

- 比嘉春潮賞(歴史学・考古学) ティネット・マルコ氏
- 仲原善忠賞(文学・芸能学・工芸学) 近藤 健一郎氏
- 金城朝永賞(言語学・民俗・民族学) 玉城 毅氏

第25回金城芳子基金の応募

「金城芳子基金」は、沖繩女性の地位向上のために献身された金城芳子さん(1902-1991)の強い意志により、そのご遺族によって平成4年に当協会に設置された。沖繩女性のため、社会的に意義のある活動や調査研究を行う個人、団体及びグループに助成している。平成

28年度までに24の個人・団体に助成を実施した。平成29年度の応募締切は3月31日。当日消印有効。

沖繩青少年勉学支援制度

この制度は、本土(沖繩県以外)の都道府県で働きのながら学ぶ沖繩青少年を支援し奨励するため、昭和48年に設置された。この制度に賛同いただいた沖繩出身者を含め多くの方々からの温かい寄附金でつくられた「働きながら学ぶ沖繩青少年支援基金」の運用により勉学支援金を給付し、これまで延べ1,119人の働きながら学ぶ青少年が支援を受け、習得した資格や技術を活かしてそれぞれの進路を歩んでいる。平成29年度の応募は、4月1日〜6月30日まで。当日消印有効。

※詳細は「公益財団法人沖繩協会」のホームページより